

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 15 日現在

機関番号：33107

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530173

研究課題名(和文) アメリカン・デモクラシーにおける「草の根」保守主義の政治理論的検討

研究課題名(英文) The theoretical study of "Grass Roots" conservative movements in the American Democracy.

研究代表者

越智 敏夫(Ochi, Toshio)

新潟国際情報大学・国際学部・教授

研究者番号：20247183

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：現代アメリカ社会における「草の根」保守主義運動 Tea Party について研究し、その運動がもつ政治理論的意義について考察した。2010年の米国議会中間選挙を前にその存在がクローズアップされた当該運動は2014年の中間選挙に至る時期においても政治的意義は依然として大きく、従来の共和党系保守主義とも異なる運動であることを論じた。

また本運動はアメリカ政治のみならず、先進資本主義国に現れている新しい政治運動として注目すべきものであることを思想と運動の両レベルにおいて研究し、その政治理論上の意義についても考察した。それらの成果は論文、著書等において発表済みであり、今後も継続的に発表する予定である。

研究成果の概要(英文)：The Tea Party Movement, a new type of political movements in the US politics, appeared in 1990s and they acted in mostly local protest events in those years. The movement distinguish itself after the midterm election of 2010.

In my project, I researched the movements after the midterm election to the presidential election of 2012 and the midterm election of 2014. Especially I argued the movement's differences with the conservative and traditional movements of the GOP after the years of the Reagan administration. Furthermore, I clarify the issue by arguing that this movement does not concerns only in the US politics but also in the all of advanced capitalist countries as a new political movement from points of view of political thoughts and actions.

I have published books and papers on this issue and will continue to write more articles on this movement.

研究分野：現代政治理論

キーワード：政治理論 政治思想 政治運動 アメリカ政治 比較政治 市民社会 市民運動

1. 研究開始当初の背景

2010年11月の米国中間選挙において茶会運動は共和党内の巨大勢力となった。本来、共和党はイデオロギー的分裂の危機をもつ政党である。妊娠中絶、移民規制、同性愛、銃規制などに関して意見の一致が困難であり、それらをめぐって党内では伝統的保守、宗教的原理主義、ネオ・コンサーバティブらの対立が顕在化する。ところが Grover Norquist が Rock the House (1995) で論じたようにこれらの対立は1994年中間選挙での保守大同団結で解消された。その状況を一変させたのが2008年のオバマ勝利である。この時点で共和党系保守各派は分裂する危険性があった。

この危機的状況において現われた市民運動が茶会運動である。この運動の基本的な主張は TEA の語呂合わせとして表れているように "Taxed Enough Already" である。つまり減税の主張のみで統合されている。この運動については現在進行形であるため、多くのことは論じられてはいない。しかし以下のことは指摘しうる。

まず重要なのは共和党との関係である。共和党は基本的にエリート政党だった。しかし現在の茶会運動では従来は積極的に政治参加してこなかった層が自発的に共和党内部へと入り込み、今回の中間選挙においては候補者さえ擁立する勢力となった。その意味において本運動はアメリカ政治において前例のない形態となっている。

次に重要なのは、この茶会運動がもつ従来の原理主義運動との異同である。たしかにこの運動はその名前のとおり独立戦争時のアメリカを理想としている点において原点回帰的運動である。しかしそのイデオロギーを詳細に検討するとアメリカ政治において断続的に現れる原理主義運動とも異なっている。

また茶会運動は具体的な政策の主張がなく、また強力な指導者にも欠けている点においても特異な運動である。減税のみが唯一の具体的な主張であり、他はオバマ政権批判というネガティブ・キャンペーンでしかない。この点については運動の重要なイデオログである David Limbaugh が Crimes Against Liberty (2010) で認めているように、具体的争点に言及すれば共和党系の運動は分裂の危機を迎えるためでもあるが、強力な指導者も存在しないために従来のポピュリズム型の大衆運動とも異なっている。これらの点においても本運動は前例をもたない。

2. 研究の目的

茶会運動について研究する意義と目的については以下のようなものが想定される。第一に市民運動における保守主義の機能につ

いて論じる意義である。従来の政治理論における市民運動論は通常、進歩的なものが対象とされていた。特に米国においては公民権運動以降、市民運動は人種差別を否定し、リベラルな体制を作ろうとする運動を中心として展開してきたといえる。

しかし現行の茶会運動は白人中産階級のオバマ政権への不満によって成立している。そこには黒人を中心とする貧困層への敵意さえ介在している。貧困層は生活保護の対象となっているのであり、白人中間層から見れば税金を負担せず政府の庇護によって生活しているように見えるからである。また茶会運動は減税により「小さな政府」を作り上げることにも主張する。それは前述の貧困層への敵意とも関連するが、2010年に成立した新医療保険制度への極度の敵意にも表れている。同様に、不正な融資を続け、不動産不況を作り出した金融業界の保護にも反対している。

以上のような茶会運動の保守主義的主張は、従来のアメリカにおける市民運動とはかなり政治性が異なるものであり、金融業界への批判に顕著なように、従来の共和党主流派とも異なる。このような運動は従来の米国には存在してこなかった。したがってこの新しい草の根保守主義について研究、調査することは、現代の先進資本主義国の政治理解、特にその政治運動に関する知見について新たな視角を提供することになる。なぜならば先進資本主義国での同様な運動が生まれつつあるからである。

たとえば日本の現代政治における「みんなの党」も同様な運動と見ることが出来る。2010年の参院選で躍進した彼らのマニフェストには減税、小さな政府、企業優遇の廃止など、茶会運動とほぼ同様な単語が並んでいる。議会における小規模な勢力に比べて、大衆運動において支持を拡大するという方法も類似している。さらには複数の相互に異なる勢力が「小さな政府」といった単純なスローガンのみで統合されている点も同様である。

第二の意義は政治における非合理性について研究する点に見出される。茶会運動の単純な主張が奏功しているとしても、依然として残るのは本運動が隆盛を維持してきた他の要因である。この運動はエリートと大衆の乖離を利用しているとはいえ、他にも多くの政治的情念が起動力となってこの運動を支えているといえる。米国の地方政治に伝統的なワシントン政治への失望、経済的不況期に破産することへの集団的恐怖、孤独な生活からの逃避、黒人に対する漠然とした恐怖感などの曖昧な政治意識は Barbara Ehrenreich が Fear of Falling (1989) において描写したものであるが、その中間層の非合理ともいえる精神状態が現在のアメリカにおいてより顕著な形で現れたのが茶会運動だといえる。

18 世紀スコットランド啓蒙思想に典型的なように近代西欧世界における政治的思惟は合理性を高く評価してきた。そのため近代政治学もその理論的な枠組みは人間の合理的な行動をもとに作られてきたし、通常は人間の非合理的な行動を批判してきた。しかし一方で、人間の情念の爆発が政治においていかに重要な機能を果たしてきたかということにも政治学は着目してきた。

そこで本研究は、茶会運動に参加する人々の政治意識を調査することによって、そのような非合理的な行動様式がどのように政治学において理念化されるかということについて検討したい。これらの問題領域は以上のように伝統的な政治理論の主題というだけではなく、同時代的な民主主義理論においても中核的な位置をしめている。20 世紀の重要な政治理論であった利益集団多元主義は利益の合理的追求に基礎をおいていたが、その多元主義への批判を起点とする討議的民主主義論が 20 世紀末に生起する。その議論においては利益を含む全ての情念を否定しようとする一種の禁欲主義が復活する。

しかし代表的コミュニタリアンである Michael Walzer は *Politics and Passion* (2004) において、そのような理性による情念の抑制を唱える禁欲主義がいかに政治を混乱させるかを指摘し、非合理的な情念の政治的效果を論じる。彼は「自由と平等を尊重する近代的主体」による討議よりも、従来のリベラルな政治理論が看過してきたような情念による民主主義の安定を重視する。

これらの指摘は現在の茶会運動を例として考えると、よりその政治理論的意義が明確になる。しかし茶会運動に関する議論は端緒についたばかりである。この状況において現在までの議論を整理し、本事象をもとに新たな理論展開を図ることには重要な政治学的意義が存するといえる。

3 . 研究の方法

本研究は応募者のみよってなされる個人研究の形をとる。内容としてはまず米国における保守主義および市民活動に関する先行研究を理念的に確認したうえで、茶会運動に関する議論を整理する。その後も継続して茶会運動に関する同時進行的な議論の整理をおこないつつ、茶会運動にかかわる運動家、政治家、政治理論家、ジャーナリストらへのインタビューをおこない、実証研究として整理する。また茶会運動に対抗する他の運動に関しても同様に調査する。その際、同時代的な政治理論家がどのような特徴を茶会運動に見出しているのか検討することにより、本運動と政治学的理念の関連についても検討する。

4 . 研究成果

現在のアメリカ社会における、いわゆる新しい「草の根」保守主義について研究し、特にその運動がもつ政治理論的意義について考察した。2010 年の米国議会中間選挙を前にその存在がクローズアップされた Tea Party (茶会運動) は、2012 年の大統領選挙から 2014 年の中間選挙への時期においてもその政治的意義は依然として大きく、共和党系の保守主義に限定しても従来とは異なる運動であることを論じた。

またこれらの運動はアメリカ政治のみならず、先進資本主義国に現れている新しい政治運動の一形態として注目すべきものであることを思想と運動の両レベルにおいて研究し、さらにはその政治理論上の意義についても考察した。それらの成果は論文、著書等において発表済みであり、今後も継続的に発表する予定である。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

越智敏夫、強制される忠誠：フィランソロピーとリベラル・ナショナリスト、年報政治学 2011- 特集：政治における忠誠と倫理の理念化、査読無、2011、93-112

越智敏夫、ナショナリズムと自己批判性、立教法学、査読無、86 号、2012、45-63

Toshio Ochi, "Apocalyptic Memories and Subjective Movements: Differentiation by Political Power in Postwar Japan", *Boundary 2, an international journal of literature and culture, Twin Offspring of Empire -- A Dossier: Crisis of the Everyday/Everyday Crisis: Across Time in Japan*, Summer 2015: Volume 42, Number 3, pp.55-63.

〔学会発表〕(計4件)

発表者名：Toshio Ochi
題名：“Apocalyptic Memories and Subjective Movements: Differentiation by Political Power”
発表学会：国際会議 “Crisis of the Everyday/Everyday Crisis: Across Time in Japan”
発表会場：The University of North Carolina at Chapel Hill (アメリカ合衆国)
発表日時：2013年4月13日

発表者名：Toshio Ochi
題名：“Another Coast for the USA: Civic-mindedness in Postwar Japan and American Democracy”
発表学会：International American Studies Association (IASA) Sixth World Congress
発表会場：Szczecin, Poland.
発表日時：2013年8月5日

発表者名：Toshio Ochi
題名：“Politics and Political Science after the Tohoku Earthquake”
発表学会：American Political Science Association (APSA) Annual Meeting & Exhibition, Japan Political Studies Group Meeting,
発表会場：Chicago, USA.
発表日時：2013年8月30日

発表者名：越智敏夫
題名：政治理論における<有効性>
主催学会：立教政治研究会
発表日時：2014年7月5日
発表場所：立教大学

〔図書〕(計1件)

— 越智敏夫、ミネルヴァ書房、文化の政治、政治の文化：理論と市民社会アメリカ、2015、(入稿済)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

越智敏夫(OCHI, Toshio)
新潟国際情報大学・国際学部・教授
研究者番号：20247183

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし